

神戸 GCP の成果に関する一考察 —参加学生の面接調査をもとに—

A Study of Outcomes of the Kobe Global Challenge Program: Based on Interviews for Participating Students

友松 史子 (神戸大学 大学教育推進機構 特命助教)

米谷 淳 (神戸大学 大学教育推進機構 教授)

2016 年度より低年次学生を海外学修に送り出している神戸 GCP は、2018 年度末、初年度に参加した学生が最終学年となった。そこで本プログラム全体を評価する作業の一環として、該当学生 8 名へ面接調査を行った。本稿はそこでの発言内容を 5 つの分析項目に抽出し、代表的な発言内容を挙げながら、主体的活動に重点を置いた海外学修がその後どのような学修成果を生み出すかについて考察したものである。調査結果を整理することで、本学への入学動機として、海外プログラムに参加することを目的として本学へ進学した学生はいないこと、神戸 GCP を知った媒体として、海外研修に関心のある学生は HP や SNS だけでなく、人づてや掲示などあらゆる広報媒体に注意を払い探していることが分かった。また、学外学修では現地で得る気づきによりそれまでとらわれていた感覚や思考から脱しているのが伺え、その学修インパクトは高年次になっても持続し、その後の学修や就職、大学院進学といったキャリア形成に活かしていることが分かった。また、学生 3 名の詳細事例でも神戸 GCP の経験が後の大学院進学や海外留学のレディネスをつくりあげる上で大きな役割を果たしていることが確認できると言える。

1. はじめに

「神戸グローバルチャレンジプログラム」(以下、「神戸 GCP」と表記する。))は、2015 年度、文部科学省「大学教育再生加速プログラム (AP) テーマⅣ 長期学外学修プログラム (ギャップイヤー)」事業に採択され、2016 年度より 1・2 年次学生を対象に海外での学外学修に送り出してきた。主体的な活動を行うことに重点を置いた本プログラムは、2018 年度、プログラム初年度に参加した学生が最終学年となり、学士課程全体における本プログラムの学修成果を把握できるようになった。

そこで、プログラム全体を評価する作業の一環として 2018 年度末に卒業を控えた 2016 年度神戸 GCP 参加学生へ面接調査を行った。その結果は実施報告の一部となるものであるが、内容はグローバルリーダーシップトレーニングの実践的研究(米谷, 2017)として示唆深いと考えられる。そこで、面接調査の結果を基に、1・2 年次を対象とした海外学修プログラムがその後の学生の学びやキャリア形成にどのような影響を及ぼすか、すなわちグ

ローバルリーダーシップトレーニングがどのような学修成果を生み出すかについて考察する。

2. 2016年度神戸GCP学外学修コースについて

2016年度神戸GCP学外学修コース実施状況は、7部局13コースが開講され、そのうち12コースが実施された。同年度の参加学生115名のうち75名が海外での学修活動に、40名が国内の国際的なフィールドでの学修活動に取り組んだ。

3. 方法

3.1 調査対象

対象者は2016年度に神戸GCPで海外の学修活動に参加し、2018年度末卒業予定の学生8名であった。8名の所属学部、神戸GCP参加年次、参加コース、渡航国を表1に示す。3年次が1名含まれているが、この学生は早期卒業し、法科大学院へ飛び入学予定の学生であった。

表1 面接調査対象の内訳

No.	所属学部	17時~1-時の学年	神戸GCP参加年次	神戸GCP参加年度	参加コース	渡航国
A	発達科学部	4	2	2016	ボランティアチャレンジコース	ネパール
B	経営学部	4	2	2016	フィールドワークチャレンジコース	タイ
C	法学部	4	2	2016	フィールドワークチャレンジコース	ミャンマー
D	経営学部	4	2	2016	フィールドワークチャレンジコース	タイ
E	法学部	4	2	2016	グローバルチャレンジコース(学生企画型)	ネパール
F	経済学部	4	2	2016	産官学連携アドバンスコース	ベトナム(ハノイ貿易大学)
G	法学部	3	1	2016	ボランティアチャレンジコース	ネパール
H	経済学部	4	2	2016	EUフィールドワークコース	フランス・ベルギー

3.2 手続き

面接は、著者の1人が聞き手となり、2019年1月16日から2月12日にかけて非構造化面接法により行った。1人あたりの面接時間は約30~40分であった。

4. 結果

4.1 分析項目の抽出

面接調査中に録音された音声は例外¹を除き業者が文字起こしした。その後、対象者の発話内容が多岐に渡っていたので、整理し、次の5項目に絞って分類してみた。

- ① 参加学生の背景
- ② 神戸 GCP への参加動機
- ③ 学外学修の実践内容
- ④ 学外学修の成果
- ⑤ 神戸 GCP の改善点

以下に各項目について代表的な発話内容を挙げ、それぞれに考察を加えることにする。

4.2 参加学生の背景

ここでは神戸大学への入学理由、神戸 GCP 参加までの海外渡航経験、神戸 GCP に複数回参加した学生は全ての参加状況について、以下に特徴的なものを抜粋して記載する。括弧内のアルファベットは表1の一覧で各学生に振ったアルファベットである。

<神戸大学への入学理由>

- ・高校生のとき会計士になりたいと思い、経営学部が有名な神大を受験した。(B)
- ・外国語学部にも興味があった。外国語学部、経営学部、経済学部で迷っていたとき、経済・経営学部の説明会を聞いて企業のマネジメントがおもしろそうだなと思った。国際文化学部（現、国際人間科学部）は留学する人が多い印象だが、入学前にあまり海外プログラムの存在を知らないまま経営学部に進学した。(D)
- ・中学・高校を通じてアジアの経済成長に関心があった。(F)
- ・検察官になるのが小学生のときからの夢だった。それにはロースクールに行き、司法試験に受からねばならない。家庭の方針で下宿できなかったのも、関西圏の大学で進学先を考え、ロースクールの評判から神戸大学を選んだ。(G)

<神戸 GCP 参加までの海外渡航経験>

- ・高校1年生のときイギリスへ2週間ほどの語学研修に行った。(A)
- ・大学2年の夏、観光でロシアのウラジオストックに船で行った。丸2日かかって行き、

¹ 1名(H)は都合により電話により聞き取りを行った。そのため、録音せず、聞き手が通話中に手書きでメモを取った。

3 日間滞在し、また 2 日かけて帰って来る旅行だったが、それが初めての海外渡航だった。

(C)

・大学 1 年生のとき家族旅行でバンコクへ行った。中学・高校で希望者を対象に 1 ヶ月ほどの語学研修があったが参加しなかった。(D)

・神戸 GCP に参加するまで海外渡航経験はない。(E)

<神戸 GCP へ複数回参加 (リピート) 状況>

・2 年のとき、神戸 GCP 参加という形ではなく、自費で再度、1 年のときに参加したネパールでのボランティア活動に参加した。(G)

神戸大学への入学理由については、総じて高校卒業までに大体の進路が定まっており、それに合わせて本学を選んだというもので、海外プログラムに参加することを目的として本学へ進学した学生はいない。

神戸 GCP 参加までの海外渡航経験については、大学に入学するまでに 8 名中 5 名が何らかの形で海外経験があり、3 名が高校卒業までに海外渡航をしたことがなかった。その 3 名のうち 2 名は大学入学後、個人的な旅行で海外渡航を経験し、残る 1 名が神戸 GCP で初めて海外へ渡航している。

また、既に大学入学前に渡航経験のあった 5 名のうち、A と G は高校生のとき、高校や自治体の主催する海外プログラムに参加し、その経験を通じ海外渡航に対し関心を抱き始めていると考えられる。一方、残る 3 名は幼少期から中学にかけ渡航しているが、そこで海外渡航への関心を意識し始めたとは考えにくい。従って、8 名中 6 名が大学入学後に海外プログラムを見つけて自ら海外へ行くことを意識し始めたと考えられる。

神戸 GCP への複数回参加状況については、本プログラムは総合教養科目の「グローバルチャレンジ実習」として単位授与があるが、複数回の参加、つまり重複履修を可能としている。そして、参加時期を変え様々なコースに参加する学生の動向は本プログラムの成果として注視すべき事項であると考えられる。しかし、2018 年度末卒業予定の学生の場合、リピートしたのは 1 年次に参加した G のみである。これは、今回面接した殆どの学生が 2 年次のとき神戸 GCP が始まったため、1, 2 年次学生を対象とする本プログラムに再度参加する機会がなかったからだろう。

4.3 神戸 GCP への参加動機

次に神戸 GCP への参加動機として、神戸 GCP 及び実際に参加したコース案内を何で知ったか、そして参加しようと思った理由は何かについて見てみる。

<神戸 GCP を何で知ったか>

- ・授業の中で、クォーター制が導入された年でクォーター制の紹介パンフレットと一緒に神戸 GCP の案内をもらった。(C)
- ・1年生の終わりに受講していた「教養原論」の授業が終わった後、神戸 GCP のコーディネーターからプログラムについての紹介があった。(F)

<実際に参加したコースの案内を何で知ったか>

- ・神戸 GCP のオフィスの前を通ったとき、各コースの募集案内の掲示を見た。そして、神戸 GCP のホームページを見て申し込もうと思った。神戸 GCP のオフィスで個別相談は特にしなかった。(A)
- ・タイのコース募集のポスターを見たサークルの先輩が LINE で教えてくれた。(B)
- ・安くて自分が行ったことないようなところに行ける海外プログラムはないかと探していて、図書館でネパールコースの募集案内を見つけた。(G)

神戸 GCP を知る媒体として、本プログラムでは毎年 4 月に全体説明会を 4 回行っている。全体説明会はコーディネーターによる神戸 GCP の概要説明のほか、前年度の学外学修コースに参加した学生が活動成果の報告をし、具体的な学外学修での取り組みやその成果を体験者から聞く機会も設けている。2016 年度は本プログラムが始まったばかりであったため概要説明だけであったが、4 日間で延べ約 480 名が参加した。

それにもかかわらずこれに言及する学生がいなかったのは、当該説明会の案内を掲示や語学授業内で配布するなど広く行ったものの、初年度の学生には目につきにくかったからだろうと推察される。

また、神戸 GCP は HP も開設しているが、学生にとって HP という媒体は、学内での掲示等で神戸 GCP を知った上での補助確認資料として使っていることがわかる。

学内の各種イベントや募集案内も、広報チラシを自由配布してもほとんど減らない。最近の学生はインターネットや SNS を通じて情報収集する傾向にあると言われてるように、ポスターの掲示やチラシの自由配布はあまり効果がないのかもしれない。それでも、A、G や B の先輩が見たように、学内の学生が多く集まる場所に、神戸 GCP 及び学外学修コースの募集案内のポスターやチラシを設置することは、広範囲の学生の目に付くことになり、口コミで第三者へ伝わるきっかけを作ることになると考える。神戸 GCP に参加した学生による口コミのほか掲示による口コミをどのように増やすかを工夫することが、今後、参加学生の拡大を目指す本プログラムが広報を展開する上での課題と考える。

<参加しようと思った理由>

これについては、学生がどのようなことを期待して神戸 GCP へ参加するのかわかる手

がかりとなるので、学生の言及を以下にすべて挙げる。

・行ったことのない国に行きたかった。また、アジアのいろいろなところを見てみたいと思っていた。それに、大学のプログラムなので安全面は大丈夫だろうし何とかかなると思った。(A)

・いろいろなところに行ってみたかったので、とりあえずどこでもよかった。(B)

・ミャンマーは勢いがあるというのは知っていたので、実際見てみたいというのと、その頃から民間企業への就職がしたかったので、企業訪問を中心としたミャンマーのコースで企業を回るのはいいなと思った。(C)

・タイのチェンライコースのコンセプトが「食」というので興味を持ち惹かれた。(D)

・ネパールの現地 NGO でのボランティアを通じ、国際機関や NGO などがどういう働きをしているのかというのを自分で直に体験したいというのがあった。(E)

・大学のプログラムであれば安く行けると思った。また、ボランティア活動など誰かの役に立つようなことをやってみたかった (G)

・神戸 GCP でパリとブリュッセルに行ったのは、3 年次にパリに留学予定だったため、パリに留学してやっていけるか、特にフランス語がどの程度通用するか試したかった。神戸 GCP でパリに渡航して難しいと感じたら、[そのあとで予定していた]留学はしないつもりだった。(H)

自分のキャリア形成を考えたり知的好奇心を追求したりする中で、神戸 GCP で海外に行き実際に現場を見る、現場で聞く、現場を体験することを自分のキャリア形成等に役立てようとしていることがうかがえる。また、大学プログラムが安全で安く渡航ができるというのも大学が主催するプログラムに期待される要素の一つとなっていることが示唆される。

4.4 学外学修の実践内容

神戸 GCP での学外学修での実践内容と良かったこと、悪かったこと、印象に残ったことについてまとめる。

<学外学修での実践内容>

・ミャンマー・ヤンゴンでは、商社などの日系企業や日系政府機関、日本語学校、マンダレーでは現地大学を訪問した。訪問した殆どの日系企業に神戸大学の先輩がいらして、ブレーンのような形で民主化したミャンマー政府とのパイプ役になって活躍しているという話などを聞いた。また、日本語学校や現地大学では、日本語学科の学生と互いの国の文化紹介のプレゼンテーションをし合うなどして交流をした。また、ヤンゴンの日本語学校の

学生とは一緒に観光や買い物に行った。行動をともにしていると、いろいろ日本について質問され、日本語を教えるだけでなく、日本ではどのような生活をしているかや日本の学生事情などを話した。(C)

・タイのチェンライでコーヒー農園を経営する神戸大学の先輩を訪問し、タイ北部でコーヒー栽培が盛んになった背景について教えてもらったり、コーヒーの生産・加工過程を見せてもらったりした。また、コーヒー農園へ行き、清掃活動を行ったり、農園のある村の小学校で子どもたちと交流したりした。また、食に関する視察として、日系のドライフーズ生産工場を視察したり、その農園でカモミールを摘んだり、棚田で米を生産している日本人を訪問したりした。また、現地の大学で日本語クラスを見学し、学生と交流をした。日本語クラスの学生とはもとの予定にない日も、その大学へ行って交流したり、一緒に観光に行ったりした。その他、少し遠出をしてゴールドントライアングルへ観光に行ったりもした。(D)

・困難な状況下にいる子どもの保護活動を行っているネパールの現地 NGO で、その NGO が行っている公立学校支援事業と子どもの保護育成事業の両方に関わった。

ネパールの公立学校を取り巻く教育環境は、ハード面もソフト面も厳しい。特に、ネパールは、2015年に大地震に襲われ、校舎が使用できなくなった学校では、子どもたちは簡素なプレハブ校舎で学ぶことを余儀なくされている。公立学校支援事業の活動では、そんな子どもの学習環境を整備する活動の一環として、公立学校で家庭等に問題を抱える子どもとの面談をし、NGOの相談員と解決策を思案したり、真新しい制服といった支援物資を提供したりした。そのほか、NGOスタッフと教員がタイアップして、子どもとの意見交換を行い、学校の抱える問題について話を聞いたりもした。

子どもの保護育成事業での活動では、NGOが運営する、通報を受けた子どもたちの保護施設で活動をした。家庭や生活に問題を抱え、保護され、心身ともに傷を負った子どもたちはこの施設で衣食住の提供を受けるとともに、学習面の支援も受ける。その中で音楽やダンスを通じ、健全な精神を育む試みがなされているので、音楽、ダンスの時間を子どもたちと共に過ごした。

これらと並行して、渡航前に準備した自主企画の活動として大縄跳びプロジェクトとメッセージ・リレー・プロジェクトも行った。大縄跳びプロジェクトは、NGOの仕事で行っていた学校4校で実施し、20回飛ぶことを目標に、仲間と協力する大切さを指導した。また、メッセージ・リレー・プロジェクトは、困難な状況にある子どもたちにも前向きな目標を持ってほしいというのが狙いで、子どもたちに自分の未来像を描いてもらう活動で、学校、幼稚園、児童保護施設で行った。学校では、道徳の授業として、画用紙に各々の未来像を書き、クラスで共有した。また、幼稚園では自由に絵を描いて表現してもらった。そして、児童保護施設では、画用紙に雑誌の切り抜きでコラージュしたり、カラフルに色

づけしたりなど、創意工夫にあふれたメッセージリレーをすることができた。² (E)

<良かったこと・悪かったこと、印象に残ったこと>

ここでは、学外学修の実践内容を対応して見るために、上で事例を挙げた学生の言及を次に記載する。

・もともと民間企業への就職志望で、ミャンマーでビジネス現場の知見を得たかったので、神戸 GCP に参加しその目的は果たせた。また、渡航するまで社会人の姿というのが漠然としていたので、大使館や商社への訪問を通じ、働く人に触れたのが大きかった。こういうふうに通じるのか、海外で働くのはどういうものなのかということを知り、社会人の姿が少し分かった。ただ、現地のスパイスの聞いた食事には苦勞し、またずっと気を張っていたこともあり、少しお腹を壊し、一日ダウンした。(C)

・現地学生との交流では、日本語をあまり話せない学生と英語で話すことになった。自分は英語をそれほど話せないが、単語を繋いでいくと意外と話を通じ、流暢で完璧な英語でなくても伝えたいことというのは伝わるのだと分かり、その体験がとても印象的だった。(D)

・英語ができるとかではなく、相手を理解しようとする気持ちだとか、言葉が通じなくても、何か通じ合う部分があるので、そういうところが勉強できたと思う。個人的には日本人よりも海外の人はもっとお互いを理解しようとしている人が周りに多かった印象があるので、それについて日本人がたりないかと、そういうあたりは勉強になった。(E)

そのほか、「欧米の学生たちが同じ経済学部学生なのに、彼らはもっと IT 技術やデータ分析などを活用していることが分かってよかった。」(F)、「向こうの人たちと知り合いになれたことがすごくうれしかった」(G) など、良かったこと、印象に残ったこととして言及される事柄は、活動の現場での気づきが多い。そして、そのインパクトにより各自がそれまでとらわれていた感覚や思考から脱しているのがうかがえる。

4.5 学外学修の成果

学外学修の成果に関する発言の主なものを以下にまとめる。

・ネパールに行ったこと自体、挑戦的な冒険だったので、どこでも暮らせるのではないかと思う。外国へ行ってなるとなるという気になり、海外渡航へのハードルはすごく下がった。また、ボランティアのような活動に憧れもでき、ネパールでいろいろな活動の仕方が

² 神戸グローバルチャレンジプログラム (2019)「神戸グローバルチャレンジプログラムシンポジウム実施報告ー世界へ飛び出す学生たちーGlobal Challenge from KOBEー」(pp.10-12)をもとにここにまとめた。

あると知り、行ってやってみたいという気持ちが強まった。いろいろな道に興味があるが、JICA の青年海外協力隊のような仕事にも興味がある。何をするにも実務経験が必要というのは認識しているが、選択肢はいろいろあると思っている。(A)

・帰国後、またいろんなところに行きたいと思った。就職にも神戸 GCP の経験が多少関係していると思う。就職先は世界展開している企業であり、おそらく海外部門へ配属される予定である。神戸 GCP で海外へ行く経験をして、勝手が分かるようになり、外国へ行って何かをやってきたということは大きいと思う。また、渡航先の人や一緒に行った仲間との絆ができたことも大きい。(B)

・視野は絶対広がったと思う。今まで日本、日本と思っていたが、あのような発展途上にある、ぐあっと勢いのある市場を見て、日本はこのままぬるま湯と言うか、おちおちしていられないなどと思った。また、就職先は放送局だが、就職活動では重工業メーカー、発電、プラントといった企業も受けていたので、やはり神戸 GCP があったからこそそのような業種にも目が向いたのかなと思う。(C)

・就職活動で神戸 GCP の経験はアピールになった。なぜ行こうと思ったか、どのような経験をして、どう思ったのかという話は、ありきたりの観光と比べると一味も二味も違った内容があるので、人事の人は食いついてくると思う。また、そういった話は海外に対して障壁は持っていないというアピールポイントになった。(D)

・ネパールでの経験は人としての厚みという点で影響を受けている。自分がその経験をこれから繋いでいくということについては、今後、記者として人を相手にする仕事をすることになるので、そこで活かしていくのは絶対大事だし、あと、厳しい現場を実際に見てきたことは自分の中ではプラス要素だったと思う。現場で働いている人たちの苦労がそこにあると思う。現場で離れたところで指揮をとっている人間には分からない現場の悩みというのを広く伝えていきたい。(E)

以上のように、学外学修帰国後から約2年を経ても、海外へ行くことに対する自信、視野や関心の広がりといった学外学修のインパクトが持続していることが見てとれる。

E は神戸 GCP まで、また C、D は大学生になるまで海外渡航経験がなかった。神戸 GCP に参加するまで海外経験がない（あるいは1回程度の）学生の学修成果とそれ以前に海外経験のある学生のそれに差はないようである。つまり、20歳前後までの海外経験の有無や経験量が、神戸 GCP のアウトカムに影響を及ぼすことはそれほどないのかもしれない。

4.6 神戸 GCP の改善点

最後に、神戸 GCP の改善点について学生の指摘を見てみる。

・神戸 GCP は3・4年次でも行けたらよいと思う。(B)

・入学した時、大学生は留学というのが少し頭にあると思う。なので、1 年生のときに神戸 GCP のことをもっと周知する必要がある。(C)

・学生がよく見る SNS などを活用して周知して、もう少し皆に知ってもらいたい。(D)

神戸 GCP の広報については 4.3 で少し触れたが、本プログラムの学生の認知度を上げるため、毎年広報方法を見直し、周知の機会も増やしてきた。海外プログラムに関心のある学生は、図書館で募集案内を見つけた G のように学内の自由配布物や掲示を隈なく探し、目に留めることもあろう。本プログラムの広報面での最も重要な課題は、海外渡航を躊躇している、あるいは無関心な学生に、どのように情報を波及させ、本プログラムへ引き込んでいくかという点であると考ええる。

そのためには、学生 C が「人から話を聞いただけでも印象が違うと思う」と述べるように、実際に渡航した学生から体験談を聞く機会など、本プログラム参加学生を動員する機会を増やし、彼らから直接聞いて知る仕掛けづくりをしていく必要があるだろう。

なお、学生 B の「3・4 年次でも行けたらよい」という指摘については、2019 年度より全学部 3・4 年次学生対象の「海外インターンシップ実習」を高度教養科目で開講している。この科目では、上位学年の海外での自主的な活動への取組を促進させるためだけでなく、低年次で神戸 GCP に参加した学生が、その学修成果を上位学年でも伸ばす機会を作るため、また、下級生の学外学修を引率することで、指導的役割を担いリーダーシップを涵養することも目的としている。

5. 事例研究

次に神戸 GCP の経験をそれぞれの学生がどのようにその後の学修やキャリア形成に繋げているかを具体的に見るために、3 名の学生の事例を取り上げる。

5.1 学生 F の事例

<学生の背景と神戸 GCP への参加動機>

中学・高校を通じアジア経済に関心があった。小学生の頃から中華学校に通っていたことからアジアと結びつく場に携わることが多かったためである。そのような環境で勉強する中、なぜ近年、東南アジアの経済がどんどん伸びてきているのかと考えるようになった。経済学部に進学したのは、そのあたりを勉強しようと思ったからである。

2 年次るとき始まった神戸 GCP で、経済学部の国際産官学連携アドバンストコースを開講した。これは同学部の部局間協定校であるハノイ貿易大学が開催する、アジアやベトナム経済に関する国際サマープログラムのコースであった。かねてからアジアの経済に関心があったため、迷うことなくこのプログラムへの参加を決めた。

<学外学修での実践内容>

ハノイ貿易大学でのプログラムは日本人学生のみならず現地学生や欧米の学生も参加しており、英語で行われた。

渡航先での活動内容は、講義とフィールドワークから構成されており、講義ではベトナムやアジア経済や実務的なビジネスなどに関する講義を受講した。

フィールドワークは、経験を積むことに重点を置いた実践的な内容であったが、大きく分けて、企業を訪問するものと農村や観光地へ行くものと2つのタイプの活動があった。前者ではベトナムで事業展開する外国企業を訪問し、社員から現地でしか知ることができないような話を聞いたり、後者では農村や観光地ではベトナムの歴史、文化を学びながらその経済を調べたりといったことを行った。

また、同プログラムでは活動内容に応じて課題があり、個々に現地で収集した情報を基にレポートを作成したり、発表したりする機会が設けられていた。

<学外学修で良かった/悪かったこと・印象に残ったこと>

ベトナムに行って良かったことは、ただただ日本で勉強して終わりではなく、現地へ行き、実際にベトナムに進出している企業関係者から話を聞き、そこでしか知ることができないようなことを実際に学んだことである。

それ以上に印象に残ったのは、同プログラムに参加していた同じ経済学部で学ぶ欧米の学生たちが、自分の知らない経済学的分析の手法で課題を分析・解決していたことだった。それは IT 技術やデータ分析などを活用したもので、同じ経済学部の学生であるのに当然のようにプログラミングをし、高等数学を駆使して、プログラムの中で成果を上げているのを目の当たりにし衝撃を受けた。自分が今まで知らなかったような学生たちと関わったことは非常に大きかった。

<学外学修の成果>

それまでアジア経済を学びたいと考えていたが、プログラムに参加していた欧米の学生たちが現地でデータを収集し、自分で考察したり分析したりする能力を持ち合わせていることを見たことが契機となり、アジア経済ではなく IT やデータをいかに経済学に活かしていくかという考えに変わった。IT 技術やデータ分析のスキルを先に身につけねば彼らにはかなわない、またその後、どの分野に進んだとしてもやっていけないと目が覚めた。

そして帰国後、数学とコンピューターを一つ一つ勉強して行き、3・4年次のゼミでも IT やデータ分析が活用した研究を行うゼミに所属し、卒業後はその知識やスキルを活かした分野に就職した。

＜神戸 GCP への参加を振り返って＞

神戸 GCP への参加は日本にいて知ることのできないことを知るチャンスとなった。高年次で留学して様々な気づきを得て帰国しても、大学院に進学することがなければもったいない。神戸 GCP のように 1・2 年次で語学留学以外の形で何かしら目的を持って早めに海外に出て体験をすれば、そこから得た学びを 3・4 年次で活かせる。そのチャンスが 1・2 年次にあるというのが非常に大きなポイントであり、そこで知ったことを次の 3・4 年次にどう活かすかということが大切なのではないか。

5.2 学生 G の事例

＜学生の背景と神戸 GCP への参加動機＞

小学生のころからの夢である検察官を目指し、司法試験のため法科大学院進学志望で法学部に入学した。進学にあたっては、家庭の方針で下宿できなかったため、関西圏の国立大学で進学を考え、ロースクールの評判を調べ、神戸大学を選んだ。

高校 2 年生のとき、出身市が実施する交換学生プログラムでアメリカ・ワシントン州ベルビュー市へ派遣され、同市でホームステイをした。出身高校が SGH（スーパーグローバルハイスクール）であったため、台湾での短期プログラムに参加した。そのため、大学生になってからも海外へ行きたいと思っていた。

神戸 GCP のことは、入学時の配布物に含まれていたプログラムパンフレットや 4 月の全体説明会が開催されていたのも気づかず、しばらく知らずに過ごしていたが、安く、かつ自分が行ったことがないようなところに渡航する大学主催の海外プログラムがないかと探しているとき、図書館で大学教育研究推進室が開講する、ネパールでボランティア活動をするコースの募集案内を見つけた。

もともとアジアの開発途上国に関心があり、ボランティア活動など人の役に立つようなことをしてみたいと思っていたため、ボランティアチャレンジコース・ネパールへの参加を決めた。

＜学外学修での実践内容＞

ネパールコースは山間部の小学校での活動がメインであったが、その前後数日間はカトマンドゥやポカラに滞在し、観光などをした。

首都カトマンドゥでは、日本国大使館や JICA でネパール概況や日本のネパールへの開発支援状況、2015 年に起きたネパール大地震の被害や復興支援についてレクチャーを受けた。また、自分たちで観光したいところをピックアップし、ヒンドゥー教や仏教の寺院や遺跡などを巡った。

その後、ボランティア活動のため、カトマンドゥから車で 4 時間ほど西に行った山間部の村へ向かった。

現地の小学校での活動内容は学生が主体となって何ができるか考え、担当教員からアドバイスをもらいながら準備し渡航した。

ネパールの教育は、日本で副教科といわれる図工、音楽、体育といった教科の授業がなく、いわゆる情操教育に視線が向けられていない。そのため活動内容を決めるにあたっては、同じコースに参加する学生とともに、これらの教科に関連する活動で案を出し合い、決めていった。

村での活動期間は1週間ほどだったが、具体的に取り組んだ活動としては、現地で調達した竹で竹ぼっくりを作り、ペインティングをし、完成後競争したり、美術指導として水彩画を描き混色などを教えたり、折り紙や自分たちで作って持参した紙芝居で読み聞かせなどをした。その他、震災後ということもあり、日本の学校で行うような避難訓練も教えた。

現地の小学校は1年生から5年生までであるが、これらの活動は昼休みや放課後は全校生徒を対象に、また、特定の学年を対象に授業の中でも行うこともあった。

また、小学校での活動とは別に、村の後期中等教育学校 (Higher Secondary School) ³での学生交流、村の青少年との清掃活動や交流会、農家で農作業の収穫作業を手伝った。また、現地コーディネーターが学校運営にも関わっていたため、公立学校が抱える問題などのレクチャーも聞いた。

<学外学修で良かったこと/悪かったこと・印象に残ったこと>

現地の子どもやそこに住んでいる人たちと知り合いになれたこと自体がすごくうれしく、また、村を去るとき皆から「また来てね」と言われたのがとりわけ心に残った。

村での生活環境は、停電も続き、共同の水場を使って洗濯や水浴びをするなど、日本とは全く異なったが、そのような環境での生活を含め、よい経験をしたと満足し、日本に戻った。

<学外学修のアウトカム>

村の人に別れ際に言われた「また来てね」という言葉が忘れられず、これを社交辞令で終わらせたくないという気持ちがあった。そのため、もう一回行かねばと考えていた。

ところで、法学部学士課程を3年次で早期卒業し、法科大学院に飛び入学するキャリアプランを持っていた。3年次で卒業するには、2年次でネパールに行くしか再渡航するチャ

³ 11・12年生が通う学校で、学年としては日本の高2・3年生に相当する。なお、以前のネパールの教育制度は10年制（初等教育5年、前期中等教育3年、中期中等教育2年、後期中等教育2年）であった。2008年の連邦民主共和制の移行に伴い、2009年、スクールセクター・リフォーム・プログラム導入された。2016年6月、教育基本法の改正により、日本の小学校から高等学校にあたる教育課程は、基礎教育8年、中等教育4年と制定され、順次こちらに移行しているが、2016年の学外学修当時、活動地域の学校の学年区分はまだ旧教育制度のままだった。

ンスはない。そこで2年次のとき、今度は神戸GCPへの参加という形ではなく、個別参加という形でネパールでのボランティア活動に参加し、その年度の参加学生と共に、前年度と同じ村の小学校で体育や音楽を中心とした活動に取り組んだ。

そのほか、ネパールでの経験のキャリア面へのインパクトという観点では、ネパールへ渡航するまで、自分自身は検察官を目指すので、職業キャリア面で海外との接点はないと思っていた。けれども、ネパールへ渡航したことにより、法曹界でも現在、海外の法整備支援が盛んになって来ていることもあり、将来、この分野で貢献もできればとぼんやりと考えるようになった。

<神戸GCPへの参加を振り返って>

3年次で早期卒業し、法科大学院に飛び入学することは、1年次にネパールへ渡航する前から希望していたことであった。そのため、学士課程で大学が主催する海外プログラムへの参加機会は少なくなるものの、1・2年次を対象にした海外プログラムでネパールでのボランティア活動に2回参加できたことと、3年次早期卒業し、法科大学院へ飛び入学するための勉強を両立させ、どちらもできたのはよかった。1・2年次の長期休暇にネパールでの活動に取り組み、その他の期間は勉強に集中し、タイミングよくそれぞれに専念する時間をずらせたのがよかった。

5.3 学生Hの事例

<学生の背景と神戸GCPへの参加動機>

アートビジネス、特に海外の美術をサポートするビジネスに関心があり経済学部に進学した。在学中に交換留学でフランスに行き、海外のアートビジネスを学びたいと思い、1年次にEUエキスパート人材養成プログラム（以下KUPESと表記）に応募、2年次より参加している。KUPESは、EUの社会文化、法律、政治、経済的側面について専門的且つ横断的に学ぶ、国際文化・国際人間科学部、法学部、経済学部の3学部・研究科の学生を対象とした学位プログラムで、学部学生の場合、上位学年で半年から1年のEU圏の大学への交換留学が伴う。

2年次後期初めのKUPESの授業で、神戸GCPのEUフィールドワークコース（パリ・ベルギー研修）について説明があった。3年次でフランスへの半年間の交換留学を希望していたので、そのリハーサルとなると思い、申込をした。海外経験としては、幼いころ母の実家があるフランスへ行ったことがあったが、神戸GCPへの参加は、それ以来の海外渡航であった。

<学外学修での実践内容>

パリ・ベルギー研修は2年次の2月に行われ、パリに1週間、ベルギー（ブリュッセル）

に5日間滞在した。学外学修内容は、自分で設けた課題に対してどのようなアプローチをして、答えを導き出すかというもので、渡航前に KUPES の先生の指導のもと、各自の関心に沿ってテーマとリサーチクエスチョンを決めた。このリサーチのため、渡航先ではインタビューや機関訪問といったフィールドワークが中心の活動に取り組んだ。パリでのリサーチテーマとしてフランスのアートビジネスを選び、現地在住の日本人画家にアートビジネスについてインタビューすることにした。パリ滞在中は、実際、現地在住の日本人アーティスト10人にインタビューしたほか、美術館、芸術機関を訪問し、精力的に活動を行った。また、ブリュッセルでは KUPES の先生と一緒に EU 本部などを見学し、関係者にインタビューをした。

<学外学修で良かったこと/悪かったこと・印象に残ったこと>

そもそもパリ・ベルギー研修に参加した目的は、神戸 GCP で渡航する前に申し込んだパリ第10大学への留学がやっつけられるか、特にフランス語がどの程度通用するか試したいと考えたからだった。もし、現地で難しいと感じれば、留学は見送るつもりであった。その意味で、神戸 GCP でパリへ渡航したことは、留学する上で大いに役立った。

<学外学修のアウトカム>

この研修から帰国しほどなくして、パリ留学が決まった。事前の現地経験なく留学した場合、最初の数か月から半年間は現地に馴れるために時間を費やしてしまうので、しっかり勉強するなら留学期間は1年間必要と聞かされていた。そのため、神戸 GCP はその準備として位置づけた。結果、期待通り、その経験は留學生活に活かすことができ、現地への適応に時間を取られることがなかった。

<神戸 GCP への参加を振り返って>

神戸 GCP は海外留学のためのワンステップになる。そして、神戸 GCP の経験でフランス語に自信が付き、フランスでの生活に不安がなくなったことは大きかった。

6. おわりに

神戸 GCP の目的の一つに「学びの動機づけ」がある。面接結果を整理することで、低年次で本プログラムに参加した学生が多様な学外学修を通じ、そこでそれぞれに何らかのインパクトを受け、その学びを活かし、3・4年次の学修や就職や大学院進学といったキャリア形成に繋げていることが分かった。最後にあげた3つの事例だけからも、神戸 GCP の経験が、計画通り、あるいは、予想していなかったにもかかわらず、その後の学修や大学院進学、海外留学のレディネスをつくり上げる上で大きな役割を果たしたことが確認できると言えるだろう。

ただし、今回報告した面接調査はプログラム初年度に 2 年次で参加した学生を対象としたものが大半であったために、神戸 GCP に複数回参加した学生の事例が少なく、その複数回の経験がどのような学修効果を上げたかを把握することができなかった。今後実施する面接調査では、複数回参加した学生の事例も増やし、学生の主体的な活動に重点を置いた本プログラムの学修のインパクトを分析したい。

参考文献

- 神戸グローバルチャレンジプログラム (2019)「神戸グローバルチャレンジプログラムシンポジウム実施報告ー世界へ飛び出す学生たち〜Global Challenge from KOBE〜」
http://www.iphe.kobe-u.ac.jp/kobe-gcp/symposium_report.pdf (最終アクセス : 2020 年 1 月 12 日)
- 米谷淳 (2017)「グローバルリーダーシップトレーニングの研究ー理論的基盤構築に向けてー」神戸大学大学教育推進機構『大学教育研究』第 25 号、pp.13-22.

註

本論文の作成にあたっては、面接調査は友松がコーディネーター、米谷が聞き手となって実施し、録音した音声を業者が文字起こししたものを、友松が米谷と話し合いながら整理し、文章にまとめたものを米谷が加筆・修正した。